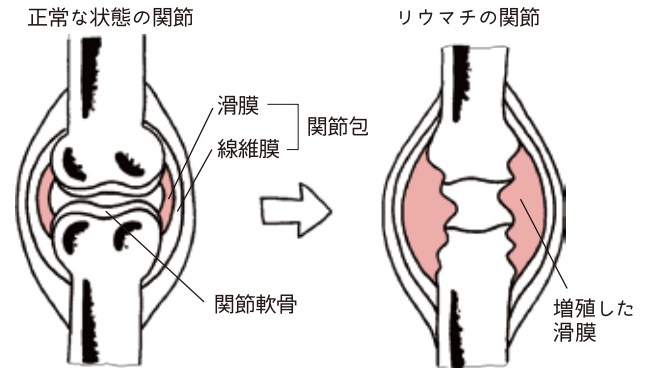


30歳以上の100人に1人がかかるといわれる「関節リウマチ」。病気の原因ははっきりとは分かっていませんが、免疫システムの異常により関節の痛み、腫脹、変形が生じる自己免疫疾患です。

「関節リウマチ」って、どんな病気？

関節の滑膜に炎症が起こる自己免疫疾患

関節リウマチは、免疫の異常によって、関節の内面を覆う滑膜が異常増殖して炎症が起こる病気。自己免疫疾患と呼ばれます。



※関節は関節包という袋状の膜に包まれており、その膜の外側を線維膜、内側を滑膜といいます。関節の動きを滑らかにしています。

関節の変形にもつながる



進行すると、関節の軟骨や骨が溶けて関節が破壊され、変形してしまうことも。

30～50歳代の女性に多い



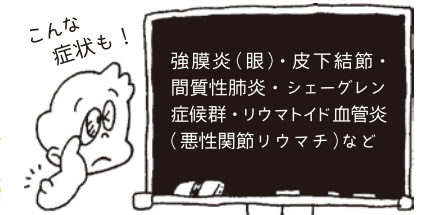
女性の罹患率は男性の約3～4倍。女性ホルモンと関わりがあるといわれています。

症状が出やすいのは朝



特徴的な症状が、朝起きたときの手のこわばり。毎朝30分以上のこわばりが、1か月以上続くようなら専門医へ。

症状は関節だけでなく全身に



微熱や貧血、体重減少などの全身症状のほか、内臓など関節以外に症状が出ることも。

早期発見・早期治療がカギ「関節リウマチ」の治療

進行すると、関節が破壊され変形してしまう関節リウマチ。新しい薬の登場などによって目覚ましく進歩する治療について、リウマチ・膠原病内科の先生に聞きました。



早期発見・早期治療によって、その後の病状の見通しが大きく変わります。

丁寧に話を聞くとともに、足指までしっかりと診察しています。

リウマチ・膠原病内科 松井聖 教授

関節リウマチの治療の中心となるのが、メトトレキサートという免疫を抑制する薬です。内服薬で、約7割の患者さんに使われています。この薬を3～6か月の間服用し、効果が見られなければ生物学的製剤を用います。近年の関節リウマチの治療成績は、生物学的製剤のおかげで非常に良くなっています。ただし、細菌やウイルスへの感染リスクが高まるため、B型・C型肝炎や結核などの感染性の病気や、呼吸器疾患、糖尿病など合併症の有無について厳重にチェックしています。生物学的製剤にはいくつかの種類があり、病状、年齢などに合わせて選択します。患者さんご自身で注射できるものもあり、頻繁に病院に通っていたり、頻りに必要がなくなるため、専門的な技術を持った看護師が療養を支援する看護外来とも連携して、しっかりとした自己注射指導を受けていただいたうえで、ご自宅での注射を推奨しています。最近では、これらの薬剤治療を早期から行えるようになってきているため、手術が必要な患者さんは少ないですが、局所的に痛み